

Title	在独日本人交換留学生のドイツ語学習に関する一考察
Author(s)	中野, 遼子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015 p.25-p.34
Issue Date	2016-05-31
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/57362">https://doi.org/10.18910/57362</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 在独日本人交換留学生のドイツ語学習に関する一考察

中野 遼子

## 1. はじめに

近年、海外で学ぶ日本人学生数が減少傾向にあるといわれているが、大学間協定等に基づいて留学する学生に限れば以前より増加している<sup>1</sup>。さらに、大学<sup>2</sup>や政府<sup>3</sup>が留学生の派遣を積極的に進めており、今後日本人留学生が徐々に増加することが予想される。このような状況の中で、日本人交換留学生が留学中、どのように目標言語を学習しているのかを調査することは重要であろう。そこで、本論文では、これまであまり研究されていないドイツへ派遣された日本人交換留学生にインタビュー調査を行い、彼らがドイツ留学中に行ったドイツ語学習について第二言語習得理論の知見を基に検討を行った。

## 2. 先行研究

本節では、まず、本論文に重要な第二言語習得理論に基づいた外国語（英語）学習法の先行研究について述べる。次に、日本人留学生の英語力やドイツ語力を扱った先行研究を概観する。

廣森（2015）によれば、近年、第二言語習得研究の成果をまとめたものが増加傾向にあるが、その大半は指導者側の視点であり、学習者の立場に立ったものは少ないという。そこで、廣森（2015）は、「インプット仮説」（Krashen, 1985）、「アウトプット仮説」（Swain, 1995）、「中間言語」、「気づき」、そして「動機づけ」といった第二言語習得理論を基盤とした英語学習法について述べている。また、佐藤（2015）も、第二言語習得研究に基づき、ビジネス英語を中心に 6 ステップから成る学習プロセスを提示した。このように、学習者主体の外国語学習方法を述べたものが近年見られるようになった。

次に、日本人留学生の英語力やドイツ語力を扱った先行研究には、まず、長短期の海外研修が語学力や異文化間コミュニケーション能力向上に与える効果に着目した研究（山本・八島、2000；牟田、2006）や、日本人留学生の英語に注目した研究がある。まず、留学の効果に関しては、嶋崎・永畑・児玉・青地（2015）が約一か月間の短期ドイツ語学研修に参加した日本人学生を対象にド

<sup>1</sup> JASSO 「平成 26 年度協定等に基づく日本人学生留学状況調査結果」（2016/04/18）  
[http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl\\_student\\_s/2015/index.html](http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_s/2015/index.html)

<sup>2</sup> 「留年せずに留学しやすく」『日本経済新聞』2012/08/11/土・夕刊

<sup>3</sup> 「大学、留学を必修化」『日本経済新聞』2014/07/03/木・夕刊（1）

ドイツ語リスニング力の変化を調査した結果、短期語学研修によりドイツ語リスニング力やそれに対する自信の向上、そして不安減少の可能性が示された。次に、留学生の英語に注目した研究について、田村（2007）は英語圏へ1年間の留学経験がある日本人留学生を対象に「実際の留学生活に必要なであった」、「事前に学んでおきたかった」英語表現についてアンケート調査を行った。さらに、英語圏で留学生活や日常生活に必要な英語を教える目的で作成された日本の大学テキストを取り上げ、実施したアンケートの回答と比較し、教科書にはまだ多くの「生きた英語」が反映されていないということを指摘した。

以上のように、外国語（英語）学習法や日本人留学生の英語力を扱った研究は多くなされている。しかし、多くが英語圏への日本人留学生の英語力を対象としており、在独日本人留学生のドイツ語力に関する研究は非常に少ない。また、日本人留学生の目標言語学習法を調査した研究も多いとはいえない。

そこで、本論文では、ドイツへ派遣された日本人交換留学生のドイツ語学習法に焦点を当て、彼らにとって効果的な学習法を明らかにしたい。

### 3. 調査方法

本節では、本研究の目的を達成するために筆者が用いた研究方法と調査協力者の概要について述べる。

#### 3.1 調査概要

筆者は、ドイツへの交換留学経験がある日本人44名に対して、2012年3月から2014年3月にかけてインタビュー調査を実施した。

質問内容は、主に2つの事柄について尋ねた。まず一つ目は、出身大学や専攻、ドイツ語学習歴など協力者個人に関することを聞いた。次に、自身の留学生活について振り返ってもらった。その際、留学中どのようなドイツ語学習を行っていたか、そして特に効果が高いと感じた学習法に関しても回答してもらった。

#### 3.2 調査協力者

本稿で取り上げるのは、2006年から2014年の間にドイツのミュンヘン大学（M）、エアランゲン大学（E）、ゲッティンゲン大学（G）、ケルン大学（K）、トリア大学（T）、ハイデルベルク大学（H）、フンボルト大学（HU）、ベルリン自由大学（FU）のいずれか1つの大学に1年間の交換留学経験がある日本人44名である。インタビュー調査に協力してくれた44名を以下、協力者と呼ぶ。イ

インタビュー協力者の名前は、匿名性に配慮して、交換留学した大学の頭文字（アルファベット）＋数字で表す（例：M1、ミュンヘン大学の協力者 1 人目）。

表 1 インタビュー協力者の内訳（括弧内は男性協力者の人数）

	ミュンヘン	エアランゲン	ゲッティンゲン	ケルン	トリア	ハイデルベルク	フンボルト	ベルリン自由	合計
単位:人	2	27(3)	4	2	1(1)	3(2)	3(1)	2(1)	44(8)

### 3.3 インタビュー調査

インタビューは 2012 年 3 月から 2014 年 3 月上旬にかけて、筆者と 1 対 1 で行われた。リラックスして話してもらうために、主にカフェ、学食、談話室、協力者あるいは筆者の自宅で行った。インタビューに要した時間は 60 分～120 分である。インタビューは協力者の許可を得て録音され、文字化された。インタビュー方法は、協力者全員に同じ質問に答えてもらう必要があったが、自由に語ってほしかったため、半構造化インタビュー法を用いた。

### 3.4 分析方法

文字化された口述データを基に、「留学中のドイツ語学習方法」に関する回答を分類・整理した。そして、分類された各項目の具体例となる部分を抜き出し提示する。次節では当分析結果を述べる。

## 4. 結果と考察

ここでは、協力者 44 名から得られたインタビューデータを分析し、結果をまとめ、考察を行う。インタビューデータを引用する際、重要な部分がある箇所には下線を引いている。さらに、引用するインタビューデータの中に筆者の補足がある場合は括弧内に示す。

### 4.1 在独日本人交換留学生のドイツ語学習

本節では、ドイツ留学中に行った「役に立ったと思うドイツ語学習法」に関する協力者の回答を整理し、それぞれの具体例を示す。

まず、協力者の回答で最も多かったものが「ラジオを聞く」(13 名)であった。次に、「DVD やテレビを見る」(10 名)、「ドイツ語を話す」(7 名)、「スマートフォンのアプリやインターネットを使用する」(4 名)、「ドイツ語を読む」(4 名)と続いている。他には、単語の暗記方法やドイツ語学習に取り組む姿勢などの例を話してくれた協力者もいた。以下、それぞれの項目をインプット (4.1.1) と

アウトプット (4.1.2) の学習法、単語の学習法 (4.1.3)、ドイツ語学習への姿勢 (4.1.4) に分類して、いくつかの例とともに具体的に見ていく。

#### 4.1.1 インプット

##### (1) ラジオを聞く

今回の協力者のうち、13名が「ラジオを聞くこと」がドイツ語学習に役立ったと語っていた。特に、ドイツェ・ヴェレ (Deutsche Welle、以下 DW、E1, E25, HU2, FU2) やバイエルン放送 (Bayerischer Rundfunk、以下 BR、E3, E12, E15) などがよく聞かれていた。「DW のラジオは 学習者用にゆっくり話してくれるのと普通の速さがある から、あれはよかった」(E1) や、「(BR のニュース番組) 5 aktuell はずっとドイツ語聞けるし、繰り返し同じニュースについて話してくれる」(E15) などの回答がある。ニュース以外にも、G2 はラジカセを購入し音楽番組をよく聞いていたという。また、2013 年度の交換留学生は、スマートフォンの“German Radio”といったドイツ語ラジオを聞けるアプリ (E21, E27, HU2) や Podcast (G3) を利用していた。教科書付属の CD ではなく、日々内容が更新されるラジオを聞くことで、生のドイツ語に触れる機会を積極的に得ようとしている様子が見える。

##### (2) DVD やテレビを見る

DVD やテレビを視聴することが 1 番良いドイツ語学習だと語る者も 10 名いた。E11 は、「自分の好きな映画で、台詞覚えちゃっているくらい何言ってるのかわかるのを、ドイツ語で見る」(E11) と回答している。E10 は、「自分が好きなアニメなり、映画なりの DVD を見て、聞くのが 1 番いいかなって。(中略) ジブリの『耳をすませば』買ったんですけど、日常会話はもちろん使ってるから、あ、こういう風に言い回しもできるんだ、とか、語彙とリスニングがいつしよにできるって面ではすごくいい勉強法かなって」(E10) と語っている。また、「いろんな DVD を見るんじゃなくて、同じ DVD を 100 回でも、200 回でも見る方がいい」(M2) ようである。しかし、「最初 (交換留学に) 来て映画で (ドイツ語学習を) 始めようと思ってきつくないですか? 長いし、すぐ眠くなって (中略) だから、慣れてきたくらいから始めた方がいいのかな」(E11) や「何回も見ても飽きるじゃないですか」(E10) という欠点もあり、渡独直後に繰り返し同じ DVD を見ることは多くの協力者にとって容易ではない。そのため、E10 は「(DVD を) 暇があったらつけてる」(E10) という。「見てもないけど、別に聞いてもないし。(中略) たまにふとした時に、あ、このシーンで使われてた言葉だなとか、たまに思い出したりする」(E10) と語り、音楽のよう

に DVD を流していたようである。ドイツでは DVD が安価な値段で購入できることと、字幕を表示できるため、E18、E23、E25 もリスニング学習のために DVD を活用していた。

テレビに関しては、HU2 がテレビチューナーを購入して、“Tagesschau”というニュース番組を見ていた。M2 は、テレビによるドイツ語学習を次のように推奨している。

子供の番組。KIKA って知ってます？ (KIKA の歌を歌う) っていう。あれは、もちろん日本人が小さい頃にテレビを見ているのと同じで、大切な言葉とかよく使う言葉とかっていうのを大きく取り上げる んですよ。だから、別に普通に勉強するにあたって最高。(中略) 親と子が話す日常会話ももちろんだし、子供でも使う言葉？から、～に行きたいとか、～に行ってきたとか、基礎的な言葉っていうものをたくさん勉強しましたね、テレビで。だから 1 番、ほんっとに全部がテレビから始まりましたね。(中略) 目で楽しめるものからと思って。頭の中で想像できないと何も始まらなかったよね。目で見て、こういうときにこういう言葉を使うんだっていうのが。もう、私の周りの中で、テレビがない人が多いんですよ。部屋に。でも悪いんですけど、ドイツ語の上達が遅い気がする。そういう人たちの方が。これから日本に留学する友達にもテレビは買わせようかなって思ってます。(M2)

上記の事例から、M2 は「目で見て、こういうときにこういう言葉を使うんだ」(M2) と理解することがドイツ語学習で重要だと語っている。また、観劇への関心が高い FU1 は、演劇を見ることが役立つ学習法だという。

このように、生のドイツ語教材、特に、視覚を使ったドイツ語学習法を強く勧める協力者が多いことが本調査から明らかとなった。

### (3) ドイツ語を読む

「読んでインプットする」(HU3) ことがドイツ語学習の際に重要だと考えている協力者もいた。E27 はリーディングがドイツ語学習で 1 番役立ったと回答している。特によかったものは、“Deutsch Perfekt”というドイツ語学習者向けの雑誌で、毎月買っていたという。さらに、タンデムパートナーと「“Die Zeit” (という新聞) をいかに理解するか」(E27) を意識することや、独辞典を読んでドイツ語を他のドイツ語に言い換えることも大事だと考えている。また、読書が好きな E14 は自分の好きな本を買うこと、HU2 は新聞、そして演劇が好

きなFU1は劇評をドイツ語で読むことがドイツ語を学習する上で役立ったと語っていた。E21は、“Woher kommt das?”というドイツ語のルーツについて書かれたアプリを暇な時に読んでいるという。彼らは、それぞれ関心のある文章が学習効果を高めていると感じていることがわかった。

#### 4.1.2 アウトプット

##### (1) ドイツ語を話す

アウトプットに関しては、「とにかくドイツ語を話すこと」(E11, E19, E22, E24 など)と回答した協力者が多かった。ドイツでは「生活の中で(ドイツ語を)話さないといけない(中略)(話す)機会は日本より絶対多い」(E11)からだという。E24は「座学もするけど、外で、友達に会って、ドイツ語を話す方が自分にとって大事」(E24)だと考えている。そして、話す機会を得るためにタンデムパートナーの重要性を指摘する協力者もいる(HU2, G4)。また、他者と話すだけでなく、「脳内会話をよくやってる」(E17)という者もいた。

##### (2) スマートフォンのアプリやインターネットを活用したアウトプット

特に2010年以降の交換留学生はスマートフォンのアプリやインターネットを活用してドイツ語を学習する例が多い。G4は、特にドイツ語のアウトプットのために、iPhoneやインターネットをうまく活用している。まず、独和辞書をiPhoneにダウンロードしており、ドイツ語学習にはiPhoneが手放せないという。そして、Twitterのbotという機能を使用し、学習したドイツ語を書き込んでいる。さらに、ドイツ語で日記を書き、「lang-8」という無料外国語添削サイトに投稿してドイツ語を添削してもらっているという。あらゆるツールを使ってドイツ語学習を行っている彼女は、ゲッティンゲン大学のドイツ語コースでC2(上級)クラスに通っている。さらに、Facebookでドイツ人や他国出身の留学生とチャットすることでドイツ語のアウトプットに役立っていると感じている協力者も多かった(M2, E6, G2他)。

#### 4.1.3 単語の学習方法

単語の学習方法について具体的に語ってくれた協力者もいた。E15は、単語帳を買って、知らない単語をひたすら書き留めた。特に、B2レベルの教科書に出てくる単語は役立つものが多く、会話が淀まなくなったという。E12は知らない単語はすぐ調べることが重要だと感じていた。特に専門である音楽用語は優先的に調べていたという。E21は単語を壁に貼って覚えたという。E14は、わからない単語はその時に調べること、そして忘れた単語を再度調べることが

よかったと述べている。また単語を調べる際は、「こういう場合はどうか」を常に考え、単語の「枝葉を広げる」(E14) ようにしていたという。HU3は 話す時に新しい単語を使おうとする ことで記憶に残ったと語っていた。

#### 4.1.4 ドイツ語学習への姿勢

ドイツ語学習の際に重要な考え方について回答してくれた協力者もいた。E14は、まず、「楽しんでやる」(E14) こと、そのために自分の好きな映画や本をドイツ語で見たり、読んだりしてみることを勧めている。E20は、「分からなかったらちゃんと聞く」(E20) ことや、「黙ってないで何かとしゃべろうとする」(E20) ことの重要性を語っていた。FU2も「話せないと思うから話せない」(FU2) と考え、「わからないことはストレスではない (中略) とにかくレスポンスを続け」(FU2) ようとする ことを意識していたという。HU1は、「文化と言葉はセット」(HU1) であるため、「ドイツ人の中に入って勉強するようにして」(HU1) いたようである。このように、ドイツ語によるコミュニケーションを続けようとしたり、自分のドイツ語に自信を持ったり、そのような意識を持ってドイツ語学習に取り組むことが重要であることがわかった。

## 4.2 考察

ここまで、協力者がドイツ滞在中に役立ったと思うドイツ語学習法について述べてきた。彼らは自分に合ったやり方を見つけ、現地で実践していた。本節では、廣森(2015)を参考にして、第二言語習得理論の観点から協力者のドイツ語学習を考察する。

今回特に回答が多かったものが、ラジオのリスニングや、DVD およびテレビの視聴などインプットを中心とした学習であった。これに関しては、廣森(2015:32-33)が先行研究の知見をまとめている。まず、幼児は5歳になるまでに約17,520時間の母語によるインプットを受けているという。しかし、中学校、高校、大学を合わせた日本人の平均英語学習時間は1,120時間以下であり、インプット量が非常に不足していることがわかる。さらに、一般的な在独日本人交換留学生は交換留学開始までに週1.5-3時間のドイツ語授業を2年間受講したのみで、多くても150時間の学習時間しかなく、英語学習時間にも到底及ばない。また、廣森(2015:34)は、「インプットがあつてはじめて学習者の中間言語体系が構築され、それに基づいたアウトプットが可能になる」と第二言語習得の認知プロセスを説明している。このことから、多くの協力者にとってインプット中心の学習が役立った理由は、彼らのこれまでのインプット量が極端



に不足していたからだといえる。

また、クラッシュェンのインプット仮説には、「現在の能力よりも少しだけ難しめ」(廣森、2015:35)の「理解可能」なインプットが必要であり、難しすぎる内容では効果がないという。しかし、彼らはインプット量を増やすためにラジオやDVD、そしてテレビなど彼らの能力よりも高めの教材を用いていた。ただ、E15は、「繰り返し同じニュースについて話してくれる」(E15)ラジオ番組を選ぶことで、第二言語習得認知プロセス<sup>4</sup>の第1段階である「気づき」を促していたと考えられる。また、ドイツ滞在中、ドイツのニュースは身近であり、ドイツ語リスニングの動機も強化されていたといえる。そして、DVDに関しては、「自分の好きな映画で、台詞覚えちゃっているくらい何言ってるのかわかる」(E11)映画を選んでいる者が多い。また、テレビによるドイツ語学習を勧めるM2は子供向け番組を視聴していた。自分の好きな映画(特にジブリの映画)や子供向け番組を選択することで、彼らはインプットの質を「理解可能」なものにしている。インプットの83%は視覚からの情報である(廣森、2015:45)。そのため、DVDやテレビは実際にドイツ語会話場面を見ることで、リスニングのみの学習より多くの情報を受け取り、「気づき」を促して理解を深めることにも役立っているといえる。以上のように、協力者の事例を見ても、「インプット仮説」を支持する結果となった。しかし、視覚情報を用いた学習方法について詳細に述べた先行研究は多くはない。本論文では、DVDやテレビに関して、「役立った」、「ほんつとに全部がテレビから始まりました」(M1)という協力者の回答が多くあることから、在独日本人交換留学生にとっては、視覚情報を取り入れたインプットが特に重要であるといえることができるだろう。

また、アウトプットに関しては「とにかくドイツ語を話すこと」という回答が多く、独自の学習方法について語るものは少なかった。しかし、E17は「脳内会話をよくやってる」(E17)と語っている。廣森(2015:67)は、「声に出して実際に言う場合と声に出さず頭の中で言う(=リハーサル)場合、脳内では類似した活動が行われている」という脳科学の実験について述べている。このことから、脳内会話は効果的なアウトプットの方法であり、E17は相手がいなくてもスピーキングの練習を行い、「自らの第二言語能力の『穴』に気づく」(廣森、2015:60)ことができたとはいえる。

G4は、スマートフォンやインターネットを駆使した独自のアウトプットの方法を用いていた。彼女以外の協力者でアウトプットにアプリを使用している者

---

<sup>4</sup> 廣森(2015:24)は先行研究の知見をまとめて、第二言語習得の認知プロセスを「インプット → ①気づき、②理解、③内在化、④統合 → アウトプット」とまとめている。

はいなかった。その理由としては、まず、彼女にドイツ語学習への強い動機が備わっていたこと、そして、ドイツ人と会話する機会が少なかったことが理由としてあげられる。ゲッティンゲン大学は日本学科がなく、ドイツ人学生と友人関係構築の機会が限られていたため、ドイツ語使用の場がないと彼女は悩んでいた。そのため、彼女はアプリを用いてアウトプットを行っていたといえる。

単語については、E15の「会話が淀まなくなった」(E15)例から、協力者はある程度不自由のないドイツ生活を送るためには、B2レベルの単語を目指すべきであることが示された。また、ドイツ語学習への姿勢について留学生の事例を用いて述べた先行研究は多くはない。しかし、「分からなかったらちゃんと聞く」(E20)こと、「黙ってないで何かとしゃべろうとする」(E20)ことを意識することは重要であろう。特に、「話せないと思うから話せない」(FU2)と考え、ドイツ語会話に自信がなくても「わからないことはストレスではない(中略)とにかくレスポンスを続け」(FU2)ようとする姿勢を持ち、ドイツ語使用場面でのストレスや不安の軽減を意識しつつ、積極的にアウトプットを行うことが留学生生活を過ごす上で重要であるといえる。

## 5. 本論文の結果と今後の課題

本稿では、在独日本人交換留学生にとってどのようなドイツ語学習が役立ったのかについて述べてきた。個人にもよるが、在独日本人交換留学生の多くがインプットを中心とした学習法が特に役立ったと語っており、不足しているインプット量を補う様子をうかがうことができた。またインプットの教材も、ラジオをはじめ、DVDやテレビを使用しており、自分と関連の深い生のドイツ語を選択していた。さらに、「頭の中で想像でき」るインプットを得るために、ドイツ語会話場面を実際に視聴しつつ学習していた。アウトプットに関しては、今回の協力者の事例からは、大学の留学制度によりドイツ語学習方法も変化することが明らかとなった。

最後に、本論文を通して、今後留学を希望するドイツ語学習者は、インプット量の増加を意識すること、視覚を使用するインプットを行うこと、日本でできるアウトプット(脳内会話やアプリを用いた方法)を試してみること、B2レベルの単語を目指すこと、さらにドイツ語使用に対してストレスや不安を軽減させる意識を持つことが重要であることがわかった。

しかし、本調査では各協力者の具体的なドイツ語学習法について述べることはできなかったが、44人という限られた協力者のインタビューデータを扱ったため、一般化が難しい。また視覚情報を取り入れた学習法の重要性が明らかとなった

が、その理由については詳細に扱うことができなかった。これについては今後の課題としたい。

#### 主要参考文献

- Krashen, S. (1985). *Input hypothesis: Issues and implications*. Longman, New York
- Swain, M. (1995). Three functions of output in second language learning. In G. Cook & B. Seidlhofer (Eds.), *Principle and practice in applied linguistics: Studies in honour of H. G. Widdowson*, pp. 125-144, Oxford University Press, Oxford
- 佐藤洋一 (2015) 『第二言語習得論に基づく、もっとも効率的な英語学習法』デイスカバー携書
- 塩澤正・吉川寛・石川有香編、大学英語教育学会監修 (2010) 『英語教育学大系 第3巻 英語教育と文化—異文化間コミュニケーション能力の養成』大修館書店
- 嶋崎絢・永畑紗織・児玉麻美・青地伯水 (2015) 「短期留学が日本人ドイツ語学習者の聴解力に与える影響」『京都府立大学学術報告. 人文』京都府立大学学術報告委員会 (65):1-16
- 田村朋子 (2007) 「留学生が使用する日常生活の英語 —日本人留学生のアンケート調査に基づいて」『言語文化学会論集』言語文化学会, (29):89-100.
- 廣森友人 (2015) 『英語学習のメカニズム —第二言語習得研究に基づく効果的な勉強法』大修館書店
- 牟田美信 (2006) 「海外留学時のカルチャーショックと英語力：カルチャーショックと英語力の伸びとの関係」『研究紀要』長崎短期大学 (18):33-44.
- 八島智子 (2004) 『第二言語コミュニケーションと異文化適応：国際的対人関係の構築をめざして』, 多賀出版
- 山本誠子・八島智子 (2000) 「日本人留学生の英語運用能力に関する一考察 (英語プロソディーの習得 —ケーススタディー)」『神戸学院女子短期大学紀要』神戸学院女子短期大学 (33)259-265.

#### <助成金>

本研究は 2013 年度大阪大学「学生海外短期研究留学助成」制度による助成を受けたものである。